



新説



百人一首
解釈講義

まるまる

～はじまりのはじまり～

トントン、ガチャリ。

その部屋の扉がノックされ、開かれた。

これから始まる百人一首の解釈という大いなる旅の講義への扉が今、開かれたのであった。

阿方：失礼しまーす。

墓家：ほいほい、どなたかな？

阿方：すみません、僕は1年の阿方（あがた）といいます。

まだこの校舎の構造に慣れなくて、迷ってしまったんですが……。

墓家：いったいどこに行きたいのじゃ？

阿方：トイレです。

墓家：そうじゃったか、トイレならこの先の廊下の角を左じゃよ。

でもおかしいのう？トイレなら学校中のそこかしこにあるじゃろうに。

学校のこんな片隅に位置するこの部屋の方まで迷ってくる生徒というのも珍しいもんじゃ。

阿方：そうですよね。僕とんでもない方向音痴なもんで。

名古屋の出身なんだぎゃあども、

東京に向かったつもりが京都に着いてしまったこともあるぐらいだで。

墓家：ほ、ほう……

阿方：どうもありがとうございます。もう漏れそうなので行きますね。

墓家：ふむ。

あわてて部屋を飛び出していく阿方であった。

が、その数分後、再び阿方はその部屋を訪れる。

今ここに、真の百人一首の新たな解釈の旅路へ通ずる扉が開かれたのである。

阿方：ごめんくさい、あ、自分のう〇こがあまりにも臭かったものだから間違えた。

ごめんください。

墓家：ほいほい、はて君は先ほどの。どうしたのかな？

もうトイレはすんだはずじゃろ？残り香がきついな……

阿方：いえね、さっきこの部屋に入ったときに気になったものですから。

墓家：なにがじゃね？

阿方：ここにあるこの膨大な本の量、はんばないですよ。

ちょっと目についたんですが、学術的なものだけじゃなくて、

小説からはてはギャル語辞典まであるじゃないですか。

それでもってこんな学校の片隅で、いったい何の研究をしているんですか？

墓家：百人一首じゃよ。

阿方：百人一首？

墓家：ほれ聞いたことあるじゃろ、昔の人が詠んだという歌を百集めたというそれじゃよ。

阿方：ほへ？全く聞いたことありませんが・・・。

墓家：なんと！本当かえ？それはまた奇異なことじゃて。

待てよ、全く知らんのか・・・ふむふむ、それは逆にありじゃぞ・・・ふんふん。

阿方：どうしたんですか？急に考え込んでしまわれたりして？

墓家：なにになに、ちょっと私の話を聞いてくれるかね？

阿方：いやです。

墓家：そう言わずにちょっとだけじゃからさあ。

阿方：本当にちょっとですか？1分以上かかったらちょっとじゃありませんよ。

墓家：そう細かくならんでもよかるう、うん、こういった細やかさも逆にありじゃな。

阿方：わかりましたよ、ちょっとだけ聞きますよ。

墓家：ありがとう。自己紹介が遅れたがわしは墓家（はかいえ）という。

わしは先ほど言った百人一首を研究しておるのじゃ。

ただし、百人一首なるもの、かなり昔から存在しているものでな、

すでに研究され尽くされているといっても過言ではないのじゃ。

阿方：じゃあ教授がやることはもうないんですね？

ここで何もやることなく暇してるというわけですか。

墓家：それじゃわしがこの学校にいる意味がなくなってしまうじゃろ。

わしがここで研究していることとは百人一首の新解釈じゃ。

阿方：新解釈？

墓家：そうなのじゃ。

現在通説としてまかり通っている百人一首の解釈にとらわれず、

新たな視点から百人一首を独自に解釈していこうというのがわしの目指すところなのじゃよ。

阿方：へえ。

墓家：はるか昔に詠まれた歌たちがこの現代という時代に語り継がれていること、

これにはその歌たちが時代時代に応じた解釈を与えることで、必ずしも一義的ではない、その時代にそった意味が与えられるのではないかということに気づいたのじゃよ。

阿方：百人一首には様々な意味の可能性が考えられるということですか？

墓家：そういうことじゃよ。自分で語っていてよくわからなくなっていたところじゃよ。

わしの言っていることをしっかりと受け止め、理解してくれるところも逆にありじゃな。

阿方：あの一、さっきからありありとか言ってますけど何のことですか？

もしかしてアリアリですか？

墓家：いやなに、こっちのことじゃよ。それでな、そうして研究をしているわしももうこんな年じゃ。

阿方：どんな年ですか？ぜんぜんわからないんですけど。

墓家：すまんすまん、こう見えてもわしはもう90近いんじゃ。

阿方：はあ、まあ90ぐらいには見えますね。

墓家：そうじゃ・・・え？年相応に見える？？まあいいか。

果たして、そんな年になってもこの研究の成果を披露する場が存在しないのじゃ。

それでいてわしのゼミには毎年応募者ゼロが続き、この研究を継ぐものがおらん状態なのじゃ。

阿方：それは大変ですね。で？

墓家：「で？」じゃなかろうもん、ここでこういう話をしているんじゃから察しておくれよー。

阿方：あ、僕にその研究を見てほしい、そしてあわよくば、引き継いでほしいということですか、、、

やだな、しかも話なげーし。

墓家：最後の方は聞かなかったことにしよう、それも逆にありなんじゃがな。

阿方：ありありうるせーな、アリーヴェデルチすっぞ。

墓家：そんなに怒らんでもよかろうもん・・・。

阿方：はい。

墓家：君は百人一首を全く知らないと言っていたじゃろ。

だからこれまでの解釈にとらわれず、自由な発想で広く解釈の意味を広げていくことができること。

細やかな性格も、各言葉の意味を細かく分析するのに適していること。

また、わしの話をちゃんと聞いてくれているようでありながら、自己主張がしっかりできるところは、

わしの解釈にも忌憚なく意見を述べてもらえることで、

むしろ独りよがりだったかもしれない自己流の解釈の誤りを正してもらえそうなこと。

これらのことから君はわしの研究を見てもらうのに、

そして引き継いでいくのに十分な素質のある人間だと考えたのじゃよ。

阿方：たまたまここを訪れた一生徒の素質を見抜き、自らの研究の成果を託そうとするは見事なり。

そこまで言われちゃ黙っておれん、やってやろうじゃないかこの阿方。

きさんの研究を、あ、いざ、見てやってもよかそうろう。

墓家：ずいぶん偉そうじゃな、というか最後よくわからんけど・・・。

阿方：あ、気分屋なんで、あんまり気にしないでください、その場の雰囲気だけでやってますから。

墓家：そうかい、まあとりあえず見ていってくれるということでありがとう。

阿方：そうしないとこの話が進みませんしね、いい加減このプロローグも長くなりすぎだし。

墓家：・・・

阿方：じゃあさっそくその研究成果を見せてくださいよ。

墓家：君が主導ではやっていかんぞ、

教授のわしが進めるからこそ、「講義」とタイトルに銘打っている意味があるのじゃからな。

阿方：・・・

墓家：さ、いざいかん百人一首の新解釈の世界へ！遥かなる航海への旅立ちぞ！！

阿方：・・・

墓家：リアクションなしか、クールじゃな。

では、記念すべき第1歩。百人一首の1番歌から見てみるのじゃ。

さてさてようやくはじまりました、この百人一首解釈講義。

一体この先どうなることやら、お楽しみにい～。

あきのたのかりほのいほのとまをあらみ

わかころもてはつゆにぬれつつ

墓家：さてこれが記念すべき最初の歌となるわけじゃが、どうじゃね？

阿方：へーこれが百人一首ですか。全部ひらがななんですね。

墓家：そうじゃな。かつてどう書かれていたかはよくわからん。

阿方：「よくわからん」って研究してるんじゃ？

墓家：そういう学術的なことに関しては他の人が研究しているからいいんじゃ。

ウィキとかで自分で勝手に調べとくれ。

それよりもひらがなの方が、その、いろいろと解釈しやすいというか、ボケやすいというか。

濁点がないのもこちらで勝手に考えていいということだと、勝手に考えているわけなんじゃよ。

阿方：なんだかよくわかるようでわからないような。

墓家：ま、あまり細かいことは気にせず、先に進めようかの。まずは基本的なところから。

阿方：はい。

墓家：百人一首は和歌を集めたものだというのは先ほど説明した通りじゃ。

和歌というものには種類がいろいろあるが、

百人一首の和歌は5・7・5・7・7の31音で表現される「短歌」じゃ。

阿方：は？この歌、32音あるじゃねえかよ。

墓家：言葉が悪いのう。しょっぱなからいきなり例外が出てしまったわけじゃ。全部で31音のみじゃ、

到底表現しきれないから「字余り」と言って余計に文字を使っている場合もある。

逆に表現しすぎるからということで「字足らず」なんてこともあるぞ。

阿方：ふーん、型にはまりきった大人になんかなりたくねえ、ってそういうやつですね。

墓家：そういうやつじゃ。

この31音しかないということ、この制限の中で伝えたいことを表現するわけじゃ。

そんなに少ない文字数で伝えたいことをすべて伝えきることができるとは思えんじやろ。

そこには抜けている文字や言葉がある、

そうしたものを読み取っていくのがわたらの使命、すなわち解釈というやつなのじゃよ。

阿方：なんだか改めて言われるとなかなかかっこいいものがありますね。

墓家：そうじゃろ、わしかっこいいじゃろ。

阿方：・・・

墓家：31音に含まれた意味、詠んだ人が真に伝えたかったことが本当に伝わっているのか？

それはただ後の時代の人間が勝手に解釈をして、

作者の思い通りのことが伝わっていないのかもしれない。

それならば逆にわしが勝手な解釈をしても問題なからうというのが

わしの研究の出発点なわけじゃ。

阿方：自由に解釈してもいいだろうって解釈、自由って素晴らしい、ってやつですね。

墓家：そういうやつじゃ。

その歌を多角的にさまざまな見方を検討し、さまざまな知識を総動員して、解釈していく。

そのためにもいろいろな本を読んでおるのじゃ。

知識があればあるだけ、解釈の幅が広がるのじゃよ。

阿方：また話なげーし。

墓家：ゴホン、まあよいわ。

他にも和歌にはいろいろと表現の方法があるのじゃが、

それはまたその表現が出てきたときにおいおい紹介していくとしようかの。

阿方：そうしてください。

墓家：では、この歌を見ていこうかの。

1番歌ということで今回はわしの研究の成果を見せてやろうぞ。

お主は適当にあいづちでも打っていてくれればよいぞよ。

阿方：ちっ、てめえも偉そうじゃねえか。

墓家：まずは「あきのたの」。

これは漢字で書くと「秋の田の」。こうじゃの。

阿方：秋の田んぼの、ということですね？

墓家：は？秋に田じゃよ、秋田のことに決まってるじゃろ。秋田県じゃよ。

阿方：はあ？

墓家：こんなところでつまずかれてもしょうがないぞ。

続いて「かりほのいほ」。知っとるかな？

阿方：知りません。

墓家：「かりほのいほ」じゃよ？

阿方：わかりません。

墓家：ふう・・・、「ロイホ」ってあるじゃろ、そののぼったもんじゃよ。

地方にいくとそうやった有名チェーン店の名前を模倣した喫茶店とか出てるもんじゃよ。

「ヌクドナルド」「マンナミラーズ」に「性部百貨店」とか。

他には「ペロペロンチーノ」「とっ床ヌキ太郎」などもあるぞい。

阿方：後の方、有名チェーン店とか関係なくなってますけど・・・。

墓家：そうじゃったかの？

ま、喫茶「カリホノイホ」。のいるこいる師匠みたいでテンポがいい店名じゃな。

こうしたリズムが耳に心地よい言葉の使い方はよく出てくるので覚えておいて損はないぞ。

阿方：は、はい。

墓家：次に「とま」。

ここには省略が使われておるのじゃが、ここまでの流れからわかるかの？

阿方：わかりません。

墓家：ちょっとは考えたらどうじゃ？

秋田の喫茶店で「とま」と来たら「トマト」じゃよ。

阿方：はあ。

墓家：で、「あらみ」。これは「ちら見」「二度見」のように「あら見」と考える。

あら？と発見したかのように見る、ということじゃ。

阿方：ふむふむ。

墓家：ここから下の句じゃ。

阿方：「シモ」の句？下品な方の句ということですか？

墓家：アホか、短歌は5・7・5の部分の「上の句」と7・7の部分の「下の句」にわけられるんじゃ。

上下の下（しも）じゃよ。

阿方：すみません。

墓家：いろいろと言葉の意味を考えることは逆にありじゃがな。

それと一応上下に分かれているといっても、

解釈的にはつなげて考えたりすることも必要じゃとは考えておるがな。

阿方：都合のいいように文節を区切っていった方がよいと考えるのですね。

墓家：その通りじゃ。それに短歌のリズムにもとられるすぎるべきではないと考えるのじゃ。

阿方：型にはまりきった大人になんかなりたくねえ、ってやつですね。

墓家：2回目じゃが、そういうやつじゃ。

阿方：うんうん。

墓家：それで「わかころも」。

「わか」は「我が」で「わたしの」という意味。

喫茶店でトマトが出てきて「ころも」と言うんじゃから、「衣をつけて揚げた」というわけじゃな。

阿方：ほうほう。

墓家：最後にまとめて「てはつゆにぬれつつ」。

ところで阿方君、先ほどシモがどうこう言っていたが、下ネタはいける口かね？

阿方：問題ありませんよ、むしろ大好物な方です。

あ、そうか、これは「手がいやらしいおつゆでびちゃびちゃに濡れて」ってそういう？

墓家：阿方君、君はゲスいなー、普通そういう風に考えるかね？

阿方：・・・

墓家：衣をつけて揚げた後に「つゆ」なのじゃから、「天つゆ」に決まってるじゃろ、あーゲスい。

「びちゃびちゃに濡れて」、というのは合ってるがな。

阿方：あってるんですね？

墓家：ゲスがうつるからしゃべりかけないでくれるかね。

阿方：・・・。

墓家：言い過ぎたかの？ここで「ぬれつつ」と詠まれているわけじゃが、最後に「つつ」と後につなげるような形で終わっているんじゃ。

余韻を残すような技法が使われているんじゃな、後続くことは想像してくれよということじゃ。

阿方；・・・。

墓家：さっきは悪かったよ、機嫌を直しておくれよー。

阿方：はい・・・。

墓家：これで全部じゃ、最後にまとめるとこういうことじゃな。

【新説】

秋田県の喫茶『カリホ・ノイホ』で店員がトマトを
あら？まだあったんだ、と見つけました。

お店にあった自分の衣でカラッと揚げてみたところ、
たいそう美味しそうに揚がったので、熱いうちにそのまま、
手が天つゆで濡れるのもお構いなしに手づかみでいったところ、
中身がぐじゅっと飛び出て、やけどを負ってしまいましたよ、トホホ。

阿方：ものすごくいろいろ付け加えられてるような気がしますが・・・

墓家：解釈とはそういうものなのじゃよ！文句あんのか！？

阿方：いえ、すみません。

墓家：いえいえ、こちらも取り乱しました。

阿方：・・・

墓家：どうじゃ、これが解釈というやつじゃ、ついてこれそうかな？

阿方：もろもろ不安もありますが、大丈夫だと思います。

墓家：よろしい。

阿方：それにしても100も歌があるとずいぶん長くなる気がしますが、
教授の方は大丈夫なんですか？

墓家：まあのんびりと気楽に考えていこうじゃないか。

阿方：え？もう全部研究されていて、それを教えてくれるわけじゃないんですか？

墓家：100もあつたら研究し尽くせているわけなからう。これから考えたりもするんじゃよ！

阿方：・・・、90近くになるのにこれまで何やってたんだか・・・。

墓家：まあ、それは設定じゃからな。

阿方：・・・、それじゃあずいぶん長い講義になりそうですね。

墓家：ま、のんびりゆったりと1つずつコツコツとやっていこうじゃないかね。

100終わるまで家に帰すつもりはないから覚悟しておくように。

阿方：わかりましたよ、とことんおつきあいしますよ。

墓家：そうじゃそうじゃ、一応「旧説」も紹介しておこうかの。

阿方：旧説？といますと？

墓家：わしらが考える解釈が「新説」、これまで考えられていた解釈が「旧説」じゃ。

阿方：つまり一般的に知られているちゃんとしたやつですよ。

墓家：・・・。

阿方：細かいところまでは紹介していないので、わかりにくいところは自分で調べてくださいね

。

墓家：誰に言ってるのじゃ？

阿方：誰にとって、読者の方々にですよ。

墓家：・・・

【旧説】

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ

わが衣手は露にぬれつつ

天智天皇

秋の田んぼのそばにある仮小屋のむしろの目が粗いために、

私の衣服の袖は露で濡れてしまっているなあ・・・。

はるすきてなつきにけらししろたへの

ころもほすてふあまのかくやま

墓家：さて2番歌じゃな。

　　前はワシの解釈を一方向的に説明するだけのものじゃったが、どうじゃった？

阿方：納得いくようでもありかないようでもあり・・・。

墓家：そうじゃろ、あれはわしの解釈じゃからな。

　　人に受け入れられることもあれば、受け入れられないこともあるじゃろう。

阿方：「られ」多いし・・・。

墓家：そこでじゃな、この歌からは一緒に解釈を考えていきたいと思うのじゃが、どうじゃろ？

阿方：もうネタ切れですか？

墓家：そういうわけじゃないんじゃが、一緒に考えた方が都合がいいんじゃよ。

　　「多角的に考え、その最善である解釈をとるべし」。これがわしの教えなのじゃ。

　　君の意見も取り入れつつ、最良の解釈を考えていこうというわけじゃ。

阿方：ただ自分一人では考えられないだけなんじゃ・・・？

墓家：・・・。

　　さ、やっていこうかの。というわけじゃから、この歌からは君の意見も参考にしていこうぞい。

　　思ったことはどんどん意見して行ってほしいのじゃ。

阿方：ほーい。

墓家：まずはじめにちょっと言っておきたいことがあるんじゃが、

　　前回「ひらがなのみ」で書かれているという説明をしたのは覚えておるな？

阿方：はあ、なんとなく。

墓家：なんとなく、て・・・まあよいわ。濁点を補う必要があるのと同様、

　　半濁音もこちら都合でつけてまえ！ということをお教えしておきたいのじゃ。

阿方：半濁音？

墓家：「ぱびぷべぽ」じゃな。

　　ざっと見たところ、百人一首では半濁音は使われておらんようじゃ。

　　どうやら半濁音は舶来ものが入ってきてから使われだしたようじゃの。

阿方：本当ですか？

墓家：いや、真偽のほどはわからん、詳しいことは勝手に調べといてくれ。

　　でも「パイナポー」だったり「アポー」だったり、

半濁音が使われる言葉は洋モノばかりじゃろ。

阿方：発音いいっすねー。

墓家：ま、半濁音も使った方が解釈の幅も広がるという利点もあるしの。

そういうことじゃからヨロシク。

阿方：はい。

墓家：で、最初の「はるすきて」じゃが・・・。

阿方：あ、これはボクの得意ジャンルですよ。「パルス来て」じゃないですか？

ほら、ラピュタの、ね、サーバーダウンしちゃんですよ、
「パルスキターー」ってとこですかね。

墓家：君は人の話を聞いていなかったのかね？

阿方：はい？

墓家：なんのために半濁音の話をしたと思ってるんじゃ。

ここは「パルス来て」じゃよ。

阿方：パルス？

墓家：ここは省略じゃな。「パルス」ときたらあの芸人さんの「インパルス」さんに決まってるじゃろ。

インパルスさんが来ましたよ、とそういうことじゃな。

阿方：はあ。

墓家：続いて「なつきにけらし」じゃが、ここはぽっと出の素人さんには難しいかの。

阿方：そうっすね。

墓家：とりあえず考える姿勢だけは見せてほしいところじゃが・・・

阿方：わかりません。

墓家：そうか、まあよいわ。

ここにはいわゆる「悪魔ちゃん命名問題」と同様の悲しい物語が語られておるのじゃ。

おそらくこの子の親は『魔法陣グルグル』が好きじゃったのじゃろうな。

阿方：ぐるぐる？

墓家：マンガ作品じゃよ、長い声のネコ、とかのな。君の得意分野じゃなかったのかね？

その主人公「ニケ」の名前を付けられてしまったということじゃな、

かわいそうなこったて、「夏木ニケ」君。

阿方：名前だったんですね。

墓家：そうじゃ、おそらく女の子が生まれたり「ククリ」とでもつけようとしてたのだろう。

で、そんな夏木ニケ君「らしい」と続くわけじゃな。

阿方：はい。

墓家：そして「しろたへの」。

阿方：「しろた、への」であってますか？

墓家：そうじゃな、お店にインパルスが来たことを白田店長へ、ということじゃな。

阿方：ことづてを頼んだと、そういうことだったんですか。

墓家：うん、そう。で、ここから伝言の内容となるわけじゃが、なんとも夏木ニケ君らしい内容でな。

阿方：ニケ君らしい？

墓家：ニケ君をわかっていれば造作もないことなんじゃが、
ニケ君をわかっていない君には少々難しいと思う。
なのでここからはまたわしの解釈を披露してやろう、
ちょいとした技法も使われていることじゃしの。

阿方：よろしくお願いします。

墓家：それでは下の句。「ころもほすてふ」、ちょいとややこしいな。

とりあえず「てふ」の部分を発音すると「ちょう」となる。

阿方：何ですか？

墓家：知らん、昔の人はそういうふうには発音してたんじゃ、そうなんじゃ。

阿方：自分で調べろってやつですね。

墓家：そうじゃな。ところで阿方君、「掛詞」とは何かわかるかな？

阿方：「かけ一言葉」ですか？「僕はしにましえん」とかですかね？

墓家：それは「かっこいい言葉」じゃな、しかも「しえん」ってあまりかっこよくないがな。

普通、「俺が君を守る！」とかじゃろ。

阿方：くっせー、しかもなんか古くっせー。

墓家：「死にましえん」も十分古いと思うがの・・・まあよいわ。「かけことば」じゃ。

和歌ではよくつかわれる技法でな、同じかなで別の意味を持たせるという技法なのじゃ。

阿方：例えば？

墓家：有名なところと言えば、「あきののに ひとまつむしの こゑすなり〜」という歌の第2句目。

「ひとまつむしの」の「まつ」が「人を待つ」という意味と「松虫」の意味を持つというわけじゃな。

阿方：急に真面目になりましたね。

墓家：・・・

阿方：ダジャレみたいなもんですね。

墓家：そうじゃな。「ころも」、これは前回の歌とは異なり人間の「ころも」、衣服じゃ。

して、「ほすてふ」、ここがかけ一言葉ポイントじゃとわしは見るのじゃ。

阿方：さっき違うって・・・

墓家：掛詞はがちとはまるとかっこいいものなのじゃよ。

最初の意味は前に「ころも」とあるわけじゃから、それを「ほすちよう」、「干す蝶」じゃな。

阿方：蝶？ですか？

墓家：そうじゃ、ここで2つ目の意味が導き出されるのじゃが、「ほすてふ」「蝶」ときて、何を思う？

阿方：そうか、「ホステス」ですね。

墓家：よくわかったのう、夜の蝶、すなわちホステスとなるわけじゃな。

阿方：夜の蝶であるホステスが干す、というように意味をかけているんですか。

墓家：それだけじゃないぞ、ここではもう一つの意味をわしは見つけたのじゃ、それが「干すテク」じゃ。

阿方：「てふ」を「テク」ってまた強引な・・・。

墓家：つまり「衣服を干すテクニックが」と後に続いていくのじゃ。

阿方：は、はあ。

墓家：最後の句「あまのかくやま」

これは単純じゃ、「アマの家具屋『ま』」じゃな。

阿方：アマの？家具屋？ま？

墓家：わからんかのう、オープンしたての家具屋さんなんじゃろうな『ま』は。

阿方：まだ不慣れだからプロじゃなくてアマ、「ま」っていうのは店名なんですね。

墓家：そうじゃ、これで全部じゃな、それじゃあ、まとめるぞい。

阿方：ちょ、ちょっと待ってください。

さっきから気になってたんですが、後半、伝言になってないような・・・。

墓家：そこなんじゃよ、そこがこの歌を上手に解釈するポイントじゃ。

まとめを見ればよくわかるじゃろて。

阿方：へーい。

【新説】

インパルスさんがお店にいらっしゃったことで、
かわいそうにおもしろ名前をつけられてしまった
夏木さんちのニケ君。

普段からおっちょこちょいのあわてんぼうさんが、
さらに気が動転してあわててしまったのであります。

白田店長への伝言、これがまたニケ君らしいのなんのって、

その内容がこれだ、ワン・ツー・スリー。

「あのですね、夜に蝶になるホステスさんが服を干すテクニック、これがまたうまいのなんのって。で、そのテクがですね、なんと、オープンしたての家具屋『ま』で教えてもらえるっていうんですよ。だから今度ぜひそこに行ってみませんか？」

白田店長「この伝言、意味わからんぞ」、トホホ。

阿方：は一、そういうことでしたか、あわてんぼうだからこんなおかしなことを。

墓家：そういうことじゃ、はっはっは。

阿方：それはそうと、前の歌もそうでしたが、最後の「トホホ」っていうのは？

墓家：これはたまたまじゃな。特にトホホ歌に「縛り解釈」してるわけではないぞ。

阿方：縛り解釈？SMですか？

墓家：違う違う。恋の歌や別れの歌などテーマを絞って解釈するという「縛り解釈」じゃ。

阿方：縛り解釈じゃない、ルールになんて縛られたくねえ、っていうやつですね。

墓家：違うな。「縛り解釈」はまだレベルが高すぎて、わしの手には負えんのじゃ。

いつの日か君が研究を発展させて、その研究を完成させてくれることを願っているぞよ

。

阿方：いやです。

墓家：・・・。

阿方：というか、今回、僕の意見取り入れられられてましたっけ？

墓家：・・・、はは、「られ」多いね。

【旧説】

春過ぎて夏来にけらし白妙の

衣干すてふ天の香具山 持統天皇

春が過ぎて夏が来てしまったようだ。

白い布の衣を干すという天の香具山に夏服が干してあるのが見えるのだから・・・。

あしひきのやまとりののをのしたりをの

なかなかしよをひとりかもねむ

墓家：さて3番歌じゃが、前回はずいぶんと不満そうじゃったのう。

阿方：ええ、ボクの意見を取り入れるとか言っておきながら、まったくでしたから。

墓家：そんなにいうなら今回はまず最初に君の解釈を聞いてみようかのう。

阿方：はい、やってみましょう。

まず「あしひきの」、これは掛詞ですかね？

「足をひきずったビッキーズが」というところですか。それで・・・

墓家：全くダメじゃな。センスが感じられん。

阿方：はあ、センスですか？

墓家：君をパートナーに選んだのは失敗だったかのう・・・。

いやいや、ここであきらめてはあかん、粘り強く粘り強くじゃ。

阿方：がんばってください。

墓家：君の事なんじゃがな・・・まあよいわ。

そもそもビッキーズさんを出すなら「あめひきの」とならないとあかんじゃろ。

そうすれば「アメちゃんをひいきにしているビッキーズが」と掛詞になるのじゃが、

それはまた別のお話じゃ。

阿方：・・・

墓家：センスのない君に解釈のポイントを教えてしんぜよう。

阿方：また偉そうに・・・。

墓家：ゴホン。

解釈のポイントは5W1Hを考えることなのじゃ!!

阿方：5W1H？

5回何かをしたら1回Hできるとかそういう特典みたいなやつですか？

墓家：君はやっぱりゲスいな。そういう発想しかできないのかね？

Who（誰が）・What（何を）・When（いつ）・Where（どこで）・Why（なぜ）の5W

How（どのように）の1Hじゃよ。

阿方：はう。

墓家：・・・。

この5W1Hを常に念頭に置いて考えることで解釈がやりやすくなるわけじゃ。

例えば1番歌ではWhereの「かりほのいほ」、

2番歌ではWhoの「インパルス」さん、「夏木ニケ」くんじゃな。

5Wの頭にきているWho、これが一番重要じゃ。

主語が決まれば自ずとその意味も限定され、かっちりとパズルがはまってくるというわけじゃな。

阿方：ふむふむ。

墓家：この3番歌でもWhoがキーポイントになっておる。

まとめて一気に「あしひきのやまとりののをのしたりのをの」を読み解くぞよ。

阿方：一気に？

墓家：そうじゃ。

ここでの登場人物は「あしひきのやま」「とりののをの」「したりのをの」の3人じゃ。

阿方：3人も？

墓家：そうじゃ。

「足を引きずっている野山さん」。

阿方：あ、足を引きずっているって僕のパクリじゃ？

墓家：違う違う、これはわしのじゃ、元から考えてあったやつじゃ。

阿方：なんかあわててません？

墓家：うるさいのう、文句あんのか？え？もうやめるか？

阿方：す、すいません。

墓家：あとの2人が「トリノ在住の小野さん」「したり顔の小野さん」じゃな。

阿方：そ、そうですか。

墓家：元気がないのう、何かあったかね？

阿方：いえ・・・

墓家：続けて「なかなかしよを」じゃが、阿方君は『東京ラブストーリー』を知っとるかね？

阿方：知ってますよ、あの名言「カンチ、SOXしよっ」ですよ、あれはインパクト大でした。

墓家：そういうところはきちんとおさえておるんじゃな、ここはそれじゃよ。

「なかなか『しよっ』を言い出せず」と続くわけじゃ。

阿方：そうですか。

まあ、3人だとなかなか言い出せないものでしょう、微妙な関係なんでしょうねこの3人。

「小野さん」が2人いるからここは兄弟？もしくは姉妹かな？

それで「野山さん」を取り合っているとかいう、そんなところですかね？

墓家：ほほう、なかなかいい読みをしとるじゃないか。

小野さんは兄弟じゃ、そしてこの男3人皆なかなか奥手なようじゃな。

阿方：え？男3人？男2女1とかじゃなくて？まずくないですか？

墓家：何がまずいことなんぞあるもんか、愛の形は人それぞれじゃ。

君につべこべ言われたくはないわ、ワタシがそっちじゃまずいとでも言うのん？

阿方：え？教授もなんですか？？

墓家：おっとすまんすまん、今のはちょっと忘れてくれ。

阿方：まさか僕のこともそういう目で・・・

墓家：何でもないって言ってるでしょ、もうっ。

阿方：・・・

墓家：気を取り直して最後の「ひとりかもねむ」。

最後の「む」、これは「ん」と発音する。

阿方：ど、どうしてですか？

墓家：何かおびえているようにも聞こえるが、まあよいか。

「む」を「ん」、これはまあ、そういうことになっておるのじゃ。

わからなかったら自分で調べといてちょうだいね、ウフン。

阿方：わ、わかりました。先を続けてください。

墓家：わかればよろしい。

またまた話は変わるが阿方君は『桃鉄』を知っとるかね？

阿方：「桃ケツ」？ぶりっぶりしたいいいおケツですか？

墓家：また君のゲスい部分が見えたな、「ももてつ」＝『桃太郎電鉄』というゲームじゃよ。

その中に出てくる貧乏神、まあこいつがくっついてまわるといろいろ悪さをしでかすんじゃ。

物件を売ったり、カードを捨てたり、いろいろじゃな。

阿方：物件？カード？

墓家：わからなければわからないでよいわ。

ここではそのゲームのことよりもこのキャラの話じゃ。

この貧乏神の口癖が「～なのねん」なのじゃ。

阿方：変な口癖なのねん。

墓家：・・・。

ここはその貧乏神さんの口癖をまねたわけじゃよ。「ひとりかもねん」とな。

声に出してわかったと思うが、この口癖ちょっとおネエ系が入っておるじゃろ。

やはりそうした系統の解釈で正しかったわけじゃな。

阿方：「ひとりかもねん」？3人いるのに1人かもしれない？

どういことですか？なぜなぜですか？

墓家：わからんか？

これまでの流れを踏まえればここでの省略を読み取ることは簡単なんじゃがのう。

やっぱり君にはセンスないんかのう？

阿方：すみません、わかりません、教えてください。

墓家：では、これまでを踏まえて全部まとめてしまうことにするぞよ。

阿方：お願いします。

【新説】

足を引きずるほど負傷している野山さん、
トリノ在住の小野（兄）さん、したり顔の小野（弟）さんが
とあるコテージに1泊することになりました。
この3人の男たち、なんとも奥手なようでみながみな
なかなか「SOXしよっ」とは言い出せず、
悶々とした3人はそれぞれが
「2人も1人でしているのかもしれないのねん」と想像しながら、
それぞれ1人でできてしまっていたのでした、トホホ。

阿方：んー？最後の方がやっぱりちょっとわからないんですけど・・・

墓家：もしかしたらあとの2人も1人でやってるかも、と

悶々と想像しながら1人でしてるんじゃないよ。

阿方：それってけっこうゲスくないですか？

墓家：いやいや、なにをしているかは言っておらんぞ、セーフじゃろ。

阿方：ナニをしているかは言っていない、アウトなような・・・。

墓家：ギリギリセーフじゃ。

阿方：で、またトホホとなっていますけど、縛り解釈では？

墓家：違う違う、タマタマじゃて、ワシにそんな力はないと説明したじゃろ。

阿方：たまたまですか。

墓家：そうじゃ、タマタマじゃ。

阿方：イントネーションがおかしいな・・・。

でも最後のトホホってというのは、誰かの気持ちですよ？これはいったい誰の？

墓家：ワシのじゃよ。

まどろっこしい関係の3人のシチュエーション、そこから発展しないことへの悲しみ

、

しかしそれぞれが妄想を膨らませて一人している、残念ではあるけども・・・

阿方：あるけども・・・？

墓家：あーん、やっぱりこのシチュエーション、

ボーイズラブファンにはたまらないのねん、ウッフ。

は一、ドドスコスコスコドドシコシコ・・・

阿方：後半、おかしいんですけど・・・。

【旧説】

あしびきの山鳥の尾のしだり尾の

ながながし夜をひとりかも寝む

柿本人麻呂

オスとメスとが離れ離れで寝るという

山鳥の長く垂れ下がった尾のように長い夜を

私も一人あなたと離れて寝ることになるのだろうか

たこのうらにうちいててみれはしろたへの

ふしのたかねにゆきはふりつつ

墓家：4番歌じゃな。

阿方：お願いしまーす。

墓家：なにやらテンション高めじゃが何かあったかね？

阿方：前回の解釈にようやく自分の意見が採り入れられたのがうれしくて。

墓家：は？君の意見なんぞとりいれておらんぞ。

全部わしのじゃ、わしの研究の成果じゃよ。

阿方：てめえが意見を取り入れていきたいって言ってたくせによお、

全部自分の手柄にしてえってか？え？

墓家：キミやっぱりちよいちよい口悪くなるよね。

すまんかったすまんかった、気を取り直して二人で解釈を考えていこうじゃないかね。

阿方：ほーい。

墓家：この歌のポイントは三句目の「しろたへの」じゃな。

覚えておるじゃろ。

阿方：たしかあれは2番歌でしたっけ？

もう1ヶ月以上も前のことですよね、忘れてしまいました。

墓家：おいおい、何を言っておるのじゃ。

1ヶ月も前じゃないぞ、さっきのことじゃないか。

これは1日のうちでやっている設定なのじゃよ。

阿方：設定って・・・

墓家：現実世界とごっちゃにしてもらっては困るぞよ。

だいたい更新の日時なんかわからなくなってしまうんじゃから、

まとめて読む人が混乱してしまうじゃろ。

阿方：読む人って・・・。

ああそうでしたね、確かにさっきやったばっかでしたよ。

墓家：うんうん。

阿方：「しろたへの」、白田店長への伝言ってやつでしたね。

ここも同じってことですか？

墓家：そうじゃ、白田店長への伝言。

その前の語が伝言主を表し、

後に続くのが伝言内容と、同じ形になっておるのじゃ。

阿方：それなら解釈しやすそうですね。

墓家：さらに言ってしまうえば、伝言主は2番歌の伝言主の関係者でもある。

阿方：関係者？あの歌の伝言主は夏木ニケくんでしたよね？

墓家：そうじゃったな、この歌の主人公は夏木さんちのミレちゃんじゃ、ニケ君の姉上じゃな。

阿方：ミレちゃん？

墓家：夏木さんちはお子さんに珍しい名前を付けるのがお好きらしいの。

阿方：最近では時代も進んでいろいろ珍しい名前もつけられているみたいですけどね。

教授はちょっと古い人間ですね。

墓家：優しくけなすね。

阿方：まあ、話はちゃんとつながってるんですね。

墓家：一見適当にやっておるようでありながら、解釈に一貫性を持たせておるのじゃ。

わし、すごいじゃろ、やるじゃろ。

阿方：・・・。

墓家：ほめてはくれないのねん。

阿方：それじゃあ頭から行きましょう。

墓家：わしが進行じゃぞ！

阿方：はいはいわかりましたよ。お願いします。

墓家：最初の「たこのうらにうち」。

これは「タコさんの裏っかわにお家」と読む。

阿方：タコさん？

墓家：八本足のタコさんじゃ、タコさんの裏っかわ、いろいろと穴とかありそうなところじゃな。

そこに小さなお家があったというわけじゃな。

阿方：小さなお家？ファンタジーですかね？

墓家：それはどうかの？この後を見るとそれがわかるぞい。

阿方：この後ですね。

墓家：「いてて」じゃ。

ファンタジー？夢？かと思ってほっぺをつねってみたら「痛てて」、じゃ。

阿方：夢じゃなかったんですね。

墓家：まあそういうことになるかのう。

そして「みれはしろたへの」と続く。

阿方：夏木ミレさんは白田店長に伝言をすると。

墓家：うむ、夏木さんちのご家族はどうもあわてんぼうさんばかりのようで、
やっぱりこの後の伝言がはちゃめちゃでの、ミレちゃんらしいんじゃ。

阿方：そうですか。

墓家：「ふしのたかねにゆき」じゃが。

阿方：「富士」に「雪」ですか、風情有りますね。

墓家：単純じゃのう、単純すぎる、ひねりが無いのう。

センスもなければおもしろみもなしか、人選間違ったかのう。

「富士」に「雪」ってそれじゃあ旧説通りじゃぞ。

わしらは新たな解釈を与えようと言っておるのに・・・。

阿方：すみませんでした。

墓家：よくわしの解釈を聞くように。

「ふしのたかねにゆき」、藤野タカネちゃんとユキちゃん、姉妹じゃな。

「はふり」⇒はぶり。羽振りがいいというんじゃな。なぜかわかるかの？

阿方：なぜって、最後の「つつ」が理由ですか？

つつ、つつ、つつ・・・？

あ、「つつ」って最初の「つ」を「ち」に変えると、ムフフ。

両方「ち」に変えても、ムフフフフ。

墓家：おいキミ、やめたまえよ、またグスイぞ。

羽振りのいい「つつ」っていったら「美人局」じゃよ。

阿方：つつもたせ？なんですか、それ？

墓家：知らんならいい、美人局を存分に楽しむがよいわ。

それではまとめるぞい。

【新説】

タコさんの裏にお家があったのー

でねほっぺをつねってみたら痛かったのね

だから夢じゃないってわかったのー

だからね、ミレ、白田店長に伝言したのー

でもね、ミレ、おっちょこちょいだからこんな伝言になっちゃったのー

「あのですね、藤野タカネちゃんとユキちゃん姉妹なんですけど、

最近妙に羽振りがいいのは美人局の片棒を担いでるからなんですよ」

白田店長「この伝言、意味わからんぞ」、トホホ。

阿方：うわー、ミレさん、なんかイタいっすねー。

僕、自分のこと、自分の名前と呼ぶ女の子嫌いですわー。

墓家：いや、君の女性の趣味は聞いておらんよ。

それよりも「美人局の片棒」って「つつ」と「ぼう」とが上手にかかっているとは思わんかね？

阿方：いえ、思いませんが。

墓家：トホホ……。

阿方：あ、また最後にトホホですね。縛りやってるんでしょ？

墓家：いや、タマタマじゃ。

阿方：そうですか。でもタコの裏にお家ってなんなんでしょうね？

墓家：知らん。

阿方：トホホ……。

【旧説】

田子の浦にうち出でて見れば白妙の

富士の高嶺に雪は降りつつ

山辺赤人

田子の浦に出てみると

白い富士の高嶺には雪が降り続けている。美しいことだなあ

おくやまにもみちふみわけなくしかの

こゑきくときそあきはかなしき

墓家：前はちょっと暗くなってしまったんで、今回は明るくいこうかの。

阿方：よっしゃこーい。

墓家：行くぞーい。

阿方：ばっちこーい。

墓家：やったるぞーい。

阿方：もうはじめてもらえませんかー。

墓家：やだぞーい。

阿方：さっさといけや！

墓家：はい。

阿方：まず「おくやま」、主語が見つかりました。「奥山さん」ですね。

墓家：よくわかったのう。わしの指導のおかげかのう。

阿方：・・・。

墓家：ねえ、無視しないで。

阿方：次が「にもみちふみ」。

ニモくん、ミチちゃん、フミちゃんの3兄妹ってことで。

墓家：無視すんなって。

阿方：それで「わけなく」。

ここは掛詞ですね、わけもなく泣く、理由もなく泣いている、と。

墓家：おいったらおい、おいてばおい、ですよ。

阿方：なんですか？

墓家：無視しないでって言ってるでしょ、もう。

その解釈、わしが採用しなかったら成立しませんからねーだ。

阿方：ちえっ、子供みたいなこと言いやがって。

ただ人の手柄にたくねえだけだろうがよ。

墓家：いやいや、ちゃんとわしにだって考えはあるんじゃ。

「にもみちふみ」、わしはこう考える。「2揉み1踏み」と。

阿方：「ちふみ」が「いちふみ」、省略ですか？ずいぶん強引な。

墓家：まあまあ、これはギブミーアシェイクなのじゃよ。

阿方：MAXですか？

墓家：ちがった、ギブミーファイブじゃ。

阿方：AKBですか？

墓家：間違えた、ギブアンドテイクじゃった。

2回揉んだら1回踏み返してくれるという、そういうお店のサービスじゃな。

阿方君も嫌いじゃないだろ、こういうの？え？

阿方：まあ嫌いじゃないですけど、エヘヘ。

墓家：そうじゃろ、そうじゃろ。

んなわけで、そんなお店では会話に煮詰まってしまうことがけっこう気まずいわけで。

話下手にはなかなか厳しかったりするもんで。

阿方：なんだか調子が変わりましたが、誰の話ですか？

墓家：いやいや一般論じゃよ、一般論。断じてわしの話じゃないぞ。

阿方：慌て過ぎだし。

墓家：「わけなく」、奥山さん残念ながらこの一般的なタイプに当てはまっちゃって。

「話芸なく」ということなのじゃ。また省略じゃな。

阿方：わあ、気まずそうですね。

墓家：で、このあと彼の素性が明らかになるぞ。

阿方：ストーリーっぽくて、なんかいいっすね。

墓家：そうじゃろそうじゃろ。

「しかのこ」、ここも省略じゃの、「司会の子」。

大物司会者のお子さんなんじゃな、この方は。

阿方：またですか？さっきから「い」ばかり省略されているみたいですね。

墓家：そうじゃの。食道から一気に小腸いっちゃう的な？

阿方：は？

墓家：いや、だから、食道から一気に小腸へだね。

阿方：何言ってんすか？

墓家：いやいや、食道から次を飛ばして小腸へ。「胃」が省略されてるっていう……。

阿方：はあ、全然面白くないっすね。

墓家：じゃこういうのは？「あうえお」。

阿方：え？これ何やってんすか？

墓家：もういいわ。先進むわ。

阿方：そうしてください。

墓家：名司会者のお子さんでありながら話芸がないという奥山さん。

このあとどうすると思う？

阿方：話芸を磨くでしょうね。

墓家：そうじゃな。彼はそういうスクールに通ってるんじゃな。

で、「ゑきくときそ」じゃが。この「ゑ」なんと読むかわかるかの？

阿方：は？教授、「ゑ」のことを「え」って発音してるじゃないですか。

墓家：いやいや、これはあくまで読者を意識してのことであってじゃな。

阿方：ゑ？読者？何言ってんすか？

現実世界と混合するなとか言っときながら、

今度は読者を意識してみたり、わけわかんないっすよ。

墓家：悪い悪い、そうじゃったな、自分で発音しておったな、アハハ。

阿方：じゃあさっさと。

墓家：はい。「ゑきくときそ」⇒「え？聞くと基礎」。

奥山さんに「え？」と聞きかえしてみるとまだスクールの基礎コースに通っている、ということじゃ。

阿方：誰が聞いたかといいますと？

墓家：お、いいね。その合の手。

「あきはかなしき」⇒アキはかなしいよ、となるのじゃな。

阿方：聞いたのは「アキ」って、また自分のこと自分の名前と呼ぶ女の子ですか？やだな。

墓家：まあまあそう言わんと、解釈を聞けば許せるかもしれんぞ。

まとめるぞい。

【新説】

奥山さんは2揉みしたら1踏み返してくれるという

新手の風俗店に入り浸っております。

この奥山さん、実はあの大物司会者さんのご子息なわけですが、
何とも残念なことに話芸がない。

そんなことで嬢との会話も煮詰まってしまうます。

滑舌も悪いようで、嬢に「え？」と聞きかえされてしまう始末。

よくよく聞いてみると、

スクールに通っているがまだ基礎コースとのこと。

「そんなの、アキ悲しい～よ」

と、嬢の同情を買うのでした、トホホ。

阿方：トホホ、はもういいや。またタマタマだろうから。

にしても風俗って言っちゃったよ。いいのかよ？

墓家：いいんじゃよ。一応言っとくけど、アキちゃん、男だからねん。

阿方：ああ、男だからいいのか、ってよくねーよ、っていうかまたかよ。

墓家：わたしの趣味だからねん。

阿方：でも「嬢」って？

墓家：そういう娘たちはいつだって女の子扱いしてほしいものなのよん。

あと「嬢の同情」って韻を踏んでいるのよん、「じょう」ず、でしょ？

阿方：ああ、そうですか、そうですか。

さっき自分のこと名前で呼ぶのが許せるかもしれないって男だからかよ。

男のほうがもっと許せねーよ。

墓家：あらやだ。

阿方：うわっ、だったら「揉み」って股間かよ、胸じゃねーのかよ。

ちょっとでも興奮した俺がバカだったよ。

墓家：いやん、胸も揉んで股間も揉んでの2揉みよん。

阿方：もういいよ、そんな細かいとこまで聞きたくねーよ。

なんでお前のポケ解釈を一個一個説明してるんだよ、俺は。

墓家：ウフフ。

阿方：ていうかさ、やっぱお前の中に先にもうなんかあるよね？

一緒に考える気とかさらさらなくね？

墓家：そんなことないわよん、一緒に考えましようのねん。

阿方：てめえ、その言葉遣いもういいだろ、わけわかんなくなってるだろうがよ。

墓家：はい。

阿方：まあいいや、俺は俺で、自分の解釈持っておくからよ。

お前が死んだ後にでもゆっくり自分の解釈を研究するわ。

墓家：おお、わしの研究を引き継いでくれるとな、喜ばしいことじゃて。

阿方：うるせえうるせえ、ていうかもうさっさと死んでくれねーかな。

墓家：うわー、そこまで言うか。

まあ、古い先短いこの身、この研究成果を全部紹介しきる前に死んでしまうかもな。

阿方：おいおい、そんな悲しいこと言わないでよー、全部教えてよー、そうしないと・・・。

墓家：そうしないと？

阿方：あ、いや、ちょっとツンデレやってみただけー。

墓家：あ、そう。

ツンデレってキミ、ツンが多いわよん。

ツンが多いとわたしもあなたのこと、ツンツンしちゃうわよん。

阿方：もうやめろ！

最初の俺の「ばっちこーい」もそういう意味でとらえてたのかよ。

で、「やったるぞーい」かよ。

だからなんで説明しちやっただよ、俺は。

墓家：・・・。

【旧説】

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の
声聞く時ぞ秋は悲しき 猿丸大夫

奥山で紅葉を踏み分けながら鳴いている鹿の声を聞くと
私も秋の悲しさを知るのだ

かささきのわたせるはしにおくしもの

しろきをみれはよそふけにける

墓家：まだまだ序盤じゃ、どんどん行くぞよ。

阿方：さっさと全部やってほしいんですが・・・。

墓家：まあいろいろと雑務もあるしのう、ネタが固まらなかつたりもするしのう。

阿方：誰がですか？

墓家：作者がじゃよ。

阿方：・・・。

墓家：さあ「かささきの」じゃが。

阿方：先進んじやったよ。

墓家：「傘さっきの」じゃな。

阿方：「傘裂き一の」の方がバカリズムさん風で面白そうですけど？

この後の「おくしもの」も「おくしも一の」にすればつながりますし。

墓家：次が「わたせるはしにをく」。

「渡せるのは42億」もの大金、と続く。

阿方：無視だよ。

傘に42億？まさか1本じゃないですよ？42億ってどれだけの量です？

墓家：ふふふ、それはこの後を「みれは」わかるぞよ。

阿方：「みれは」って「見れば」ですよ。

墓家：じゃからこの後の「みれは」を見ればということじゃよ、ユニークじゃよ。

阿方：ああそうですか。

墓家：で？

阿方：「で？」って、こっちが、「で？」なんですけど。

墓家：いや何、さっきからこの後のヒントを出しているんじゃがのう、わからんか？

阿方：わかりません。

墓家：考える気ないの？

阿方：ありません。

墓家：ありません、って。

もういいわ、「みれは」、すなわち、ミレちゃんじゃよ。

阿方：ミレちゃん？誰ですか？

墓家：簡単に以前やったこと忘れないでくれよー。

阿方：はいはい、あの夏木さんちの？

墓家：そうじゃ。あわてんぼうでおなじみのミレちゃんじゃ。

阿方：へー、！！、あーっ、最後の「にける」、ニケくん、ニケくんがいるー。

墓家：あーあ、ネタバレしちゃったよ。

勝手にテンションあがりおって、先行き過ぎだから。

せっかく小出しにいこうとしてたのにー。

阿方：いいじゃないですか、すげー、これ夏木さんちのお話ですよ。

墓家：まあいいわ。そうじゃよ、夏木さんちの話じゃよ。

阿方：そういうことですか、最初の意味不明なのはあわてんぼうさんだから？

墓家：そうそう。

阿方：とすると「しものしろきを」はあわてる要素だから・・・。

「しも」、下半身ですね？下半身が白いということですかね？

墓家：勝手に進めないでくれるかのう？

阿方：で「みれは」、「ミレちゃんが見れば」と掛詞になっているわけですね。

墓家；無視せんといてね、あってるけど。

阿方：さっき無視された仕返しですよーだ。

墓家：・・・。

まあ君も分かるようになってきたということですよーとするか。

で、次はわかるかのう？

阿方：わかりません。

墓家：わかんないの？

阿方：はい。

墓家：しょうがないのう。まだ修行が足りないようじゃな。

阿方：はあ。

墓家：「はよそふけ」じゃが・・・

阿方：教授、「は」はもう使ってますが。

墓家：いいんじゃよ。

阿方：いいんですか？

墓家：「はよ」⇒「早よ」、早くも、じゃな。

「そふけ」⇒「祖父毛」じゃよ。

阿方：「早くも祖父毛？」わかんないっすねー。

それでニケくんにつながりますか？

墓家：つながるじゃないか、さっきの「下半身が白い」、っていうのとー。

阿方：いえ、ダメです、わかりません。

墓家：：まとめでわからせてやるかのう。

「にける」⇒「ニケを蹴る」とこども掛詞じゃよ。

理解力のないキミのためにまとめで思い知らせてやろうぞ。

【新説】

「さっきの傘、ミレが渡せるのは42億までよ」

と、一見おかしいことを言っているのは夏木ミレちゃん。

なにゆえこんなことを言っているのかと申しますと、

弟のニケくんの下半身を見て慌てているからであります。

なんとニケ君の下半身、

早くも祖父の下半身のように白髪だったのです。

ミレちゃんは蹴りを入れつつ、

ミレ「あんたなんでそんなおじいちゃんみたいに白いのよ。

しかもその下のものも！早くしまつてよ」

ニケ「なんだよ、そんなにあわてなくてもいいじゃんかよ。

ていうか、じいちゃんの見たことあるんだ？

下のものだって、姉ちゃん、男の人のなんて見慣れてるだろう」

ミレ「・・・」

ニケ「ま、まさか姉ちゃん、まだ・・・？」

ミレ「(コクリ)」

t o b e c o n t i n u e d . . .

阿方：え？何これ？この解釈続くんですか？

墓家：(コクリ)。

阿方：(コクリ) じゃねーし。ミレさんのマネですか？全然かわいくないし。

墓家：とにかく続くの。

阿方：わかりましたよ。

それにしても、最近の解釈、下ネタがひどすぎませんか？

下の毛とか、ミレさんがまだ経験ないとか。

墓家：そこまではひどくないじゃろう。

ちょっと長くなるが、わしの思い出を話してもよいかのう？

阿方：何で、いきなり？

墓家：いや、下ネタに関する思い出話があるんじゃよ。

阿方：下ネタに関する思い出って・・・。長くなるならいいです。

墓家：その昔じゃな・・・。

阿方：また無視だよ。

墓家：その昔、わたしには共同研究者がおったのじゃ。

阿方：共同研究者？

墓家：うむ、この共同研究者の下ネタ解釈がそれはそれはひどくてのう。

わたしの方からそいつを切ってやったのじゃよ。

阿方：それで？

墓家：終わりじゃよ。

阿方：短い・・・。

墓家：あいつ、今頃何やってるんじゃないろう？

わしの真面目解釈にことごとく反発しておったからのう。

研究を悪いことに使っていなければよいのじゃが・・・。

阿方：自分の解釈、真面目だと思ってるんですね。

それにしても、この研究を悪いことにどう使うっていうんですか??

墓家：とんでもないエロ解釈を発表して、国家の転覆を狙うとかじゃな。

阿方：下ネタで国家が墮落するとでも？

墓家：もちろんそうじゃ、下ネタの威力、ナメんな！！

阿方：そんな力説することですかね？

墓家：ということで、これぐらいの下ネタは許してくれということじゃな。

阿方：下ネタとは認めるわけですね。

墓家：ちょいとの下ネタは会話の潤滑油じゃよ。

阿方：なんかどっかで聞いたことあるようなこと言いやがって。

墓家：さ、次に続くぞい。

【旧説】

鵲の渡せる橋に置く霜の

白きを見れば夜ぞ更けにける 中納言家持

かささぎが天の川にかける橋のような宮中の橋

その橋におりる霜が白いのを見ると夜が更けてしまったのだなあと感じる。

あまのはらふりさけみれはかすかなる

みかさのやまにいてしつきかも

墓家：さ、前の歌からの続きじゃな。

阿方：あ、ミレちゃんいますね。

墓家：そうじゃ、だからさっきの続きじゃと言ったばかりじゃろう。

阿方：いや、一応説明としてですね・・・

墓家：いらぬ心配じゃな。

阿方：・・・。

墓家：さっそくミレちゃんの物語として解釈していこうじゃないか。

まずは「あまのはらふり」⇒「天野原振り」、「天野君と原君をふり」じゃ。

阿方：ミレちゃん、振っちゃったんですか？モテはするみたいですね。

墓家：そうじゃな、ちょっと恋に臆病なところがあるようじゃ。

そして「さけみれはか」⇒「酒ミレバカ」じゃ。

阿方：振りはしたものの、自分に嫌気がさし、酒をあおり、自分を戒めるミレちゃん、ですか。

墓家：阿方くん、なかなかミレちゃんゴコロをわかっておるじゃないか。

阿方：へへ、まあそれほどでも。

墓家：別にほめてないから。

で、次が「すかなるみ」⇒「須賀ナルミ」、人名じゃな。

阿方：ナルミちゃん？女性ですか？またおかしな方に持っていこうとしてません？

墓家：残念。わしはいわゆる百合の世界は嫌いじゃ、むしろ薔薇じゃ、って知ってるでしょう？

阿方：あ、そうでしたね。ナルミくん、男性ですね。先行きましょう。

墓家：いやん、冷たくしないでん。

阿方：・・・。

墓家：「かさのやまに」⇒「傘の山に」じゃ。

阿方：あれ？傘の山？もしかして前の歌の「傘」が関係してますか？

墓家：そうじゃよ、だから続き物だと言っておるじゃろ、何回言わせれば気が済むのん？

阿方：すみません、でもあの言葉はミレちゃんが慌てていたからじゃ？

墓家：チッチッチ、甘い阿方くん、慌てて言い間違えたのは金額の部分だけじゃよ。

阿方：急にかっこつけましたねー、全然かっこよくないけど。

傘はたくさん買ったんですね、傘売りでも始めるつもりだったんでしょうか？

墓家：そこまでは知らん。

阿方：・・・。

墓家：それで「いてし」⇒「痛一し」。ナルミくん、心がズキンときたんじゃ。

阿方：恋の始まり的な？

墓家：そうじゃ、ズキンときてナルミくんはこう思う、「好きかも」と。

阿方：いえいえ教授、「好きかも」じゃありませんよ、「つきかも」ですよ。

墓家：黙らっしゃい、これだから若者は気が早くて困るわー。

阿方：はあ・・・。

墓家：ちゃんとまとめるから、しっかり聞きなさい！

【新説】

天野君と原君を振ってしまったミレちゃん。

「何やってんだらうミレ、もう、ミレのバカバカバカ」

バーで酒をあおり、自戒するミレちゃんを見るひとりの男。

須賀ナルミくんは彼女と彼女の傍らに積まれた傘の山を見て思う。

「（胸に手を当て）ここんところが痛一し、好きかも、そんで突きかも」

この後、2人はいい関係になった。

バーを出て、ホテル街に消えていったのはいうまでもない。

そしてミレはとうとう大人の女になったのである。

めでたしめでたし。

墓家：これでミレちゃんの物語は完結じゃな。

阿方：傘の山を見てキュンとくる男ってどんなですか。

それに、大人の女になってめでたしめでたし、って・・・、

まあそういう経験をしたってことでしょうけど、ゲスくないですか？

墓家：いえまったく。

阿方：そうですか。やっぱり「突きかも」がわからないんですが？

墓家：何をカマトトぶりおって、わかるじゃろ。

「突きかも」は突きたいなあという願望じゃよ。

男が女を突きたいと思って、結果ミレちゃんが大人の女になったのじゃから？

阿方：なにが「じゃから？」だよ。質問形式にしてこっちに負わせようとしても無理だから。

十分ゲスいから。

墓家：そっちに負わせるも何も、作者一緒だから。作者がゲスいだけだから。

阿方：・・・。

【旧説】

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも 安倍仲麿

空を仰いで見ると月が出ている

今見ている月もかつて見た

故郷の春日にある三笠山に出ていた月と同じなのだなぁ

わかいほはみやこのたつみしかそすむ

よをうちやまとひとはいふなり

墓家：ミレちゃん物語後の8番歌じゃな。

阿方：あの一、教授。今さらなんですけど、解釈の仕方ってどうやってるんですか？

墓家：おほっ？ようやくキミもやる気を出したってわけか？

阿方：そういうんじゃないんですけど、まあ参考までにとお思いまして。

墓家：素直じゃないのねん。

阿方：そういうのいいから、俺に研究してほしいんだろっ！

墓家：そうやって上から来るところとか好きよん。

阿方：・・・。

墓家：では、この歌はわしの考え方の経緯と同時に見ていこうじゃないかね。

阿方：どうぞ。

墓家：まずは、ひらがなにした文字たちをじっと見る。ひたすら見る。

阿方：ひらがなってじっと見過ぎてると、おかしい形に見えてきますよね。

「み」とか「な」とか。

墓家：そういう風にじっと見るわけじゃない。

ひらがなを一語一語区切って、意味をなさないかを考えてみるのじゃ。

それと、濁音や半濁音、拗音なども一緒にじゃ。

この歌で言えば「わ」「わか」「わが」「わかい」「わ、かい」といったようにじゃ。

阿方：「若い」というのはよさそうですね。

墓家：一見そう見えるが、すぐ飛びついてしまうのは甘ちゃんじゃ。

阿方：はあ。

墓家：以前話した解釈のポイントを覚えているかね？

阿方：いえ、忘れまして。

墓家：あ、そう・・・。5W1Hじゃよ。

阿方：ああ、あの5回何かしたら1回Hできるっていう？

墓家：それ君の勝手な間違いだから、2回目だから。

誰が何をいつどこでなぜどのように、の5W1Hじゃよ。

阿方：そうでしたかね。

墓家：5W1Hを常に頭において意味をなすかを考えるのじゃ。

ここでわしはそのあとの「はみや」に着目したのじゃ。

阿方：はみや？

墓家：「はみや」を「ばみや」と変換する。

阿方：ばみゅ？

墓家：「ばみや」と聞いて、ある場所を思いつかんか？

阿方：場所ですか？

墓家：そうじゃ、5W1HのWhereじゃよ。

阿方：ほえあ？

墓家：わからんならいいわ、「バーミヤン」じゃ。

阿方：「バーミヤン」でしたか。

墓家：その前の「わかいほ」を「若異母」として、

さらにそのあとの「このつつみ」を「子のタツミ」と見る。

すると「バーミヤンでパートをしている若異母の子タツミくんが」となるわけじゃ。

阿方：けっこう強引な感じですが、主語がはっきりしましたね。

墓家：そうじゃな、そしてこの後を見ていく、タツミくんの話としてな。

阿方：ふむふむ。

墓家：解釈を考えていくうえで、旧説もないがしろにははいかんぞ。

阿方：旧説って一般によく知られている普通の解釈ですよ？

墓家：あー、そうですよ。それも2回目ね。

新説を考えているのじゃからな、旧説とおんなじようになってもしょうがないじゃろ。

阿方：反骨精神的な？型にはまりきった大人になんかなりたくねえ、ってやつですか？

墓家：それは3回目じゃが、まあそんなところじゃな。

では続きじゃ。

阿方：どうぞ。

墓家：異母兄弟の話ということになると、解釈の方向性が決まってくるわけじゃ。

阿方：ほう。

墓家：さっきからおかしなあいづちしてるけど、いちいち拾わないからね。

阿方：・・・。

墓家：「しかそすむよおうち」は「シカト住むよお家」じゃ。

阿方：「そ」が「と」ですか？

墓家：いくら考えてもらちがあかるときは、無理やり文字を変えちゃうのもありじゃな。

阿方：ありなんですか？「かぼす」を「チ〇コ」にとか？

墓家：うん、それ変え過ぎだから、しかもゲスいから。

変化させるのはせめて1文字ぐらいが限度じゃろ。

それ以上だと「しかそ」が「おなべ」に、とか何でもありになってしまうからのう。

阿方：またそっちだよ。

「しかそ」という字を1文字変えて「し・か・と」、ってマジカルバナナのね。
そういうことですね。

墓家：まあそう。

阿方：わかりました、先にどうぞ。

墓家：異母兄弟のツミくんはことごとく自分のことをシカト、つまり無視するわけだ。

まあよくありがちな問題じゃな。

それでも家族は家族なわけじゃから、お家には住むよと言っておるんじゃな。

阿方：まあお母さんがパートしてるぐらいだから別々に住むようなお金はないんでしょうね。

墓家：そうじゃな、ちょっとつらいお話になってくるかもしれんな。

阿方：ふむふむ。

墓家：残りが「やまとひとはいふなり」じゃが、

ツミくんと本妻の子「ヤマト」くんと対立関係として見ていく。

阿方：微妙な関係の二人の物語として、ということですね。

墓家：そうじゃ。

シカトする「ツミ」くんに対して「ヤマト」くんが言う、「ひどっ！」。

応じる「ツミ」くん、「は？」。生意気じゃな。

それを見ていた「ヤマト」の父親がいう、「（息子よ）言うな」。

阿方：お父さんもあまり強く言えないんですね、涙ぐましい……。

墓家：そして最後の「り」。

「ヤマト」くん、唇をかみしめながら「り、りょ……、了解」と。

阿方：え？「り」が「了解」になっちゃうんですか？

墓家：変化させるのは1文字ぐらいが限度じゃと言ったが、

省略を考えるとしたなら、ある程度の文字数はよしと考えておる。

最初の方でも言ったが、この歌たちは31音しかないのじゃからな。

阿方：それじゃあ「ち」と出てきたら「チ〇コ」の省略と考えてもいいわけですね。

墓家：キミそれ好きねー、そんなに好きならしょうがない、そういう流れで解釈したらいいじゃないか。

阿方：いいんですか？そしたらボクの解釈講義は「珍説・百人一首解釈講義」とでもなりますかね？

墓家：あー、「珍」と「チン」がかかっているっていうね、ま、いいんじゃない、どうでも。

それじゃあまとめじゃ。

【新説】

バーミヤンでパートをしている若異母の子のツミくんは、

本妻の子ヤマトくんとはそりがあわないようで彼をシカトする状況。

チャラ男なので遊ぶ金欲しさに実家暮らしはしたいみたい。

タツミ「家には住むよ、金は入れないけど」

ヤマト「うわっ、ひどっ、なんだよ・・・」

タツミ「は？てめえ今なんか言ったか？」

ヤマトの父も義理の息子には強く言えない様子。

「ヤマトよ、言うな。父さんもつらいんだ、わかってくれ」

ヤマトくん、唇をかみしめながらしぶしぶ一言、「りよ、了解・・・」

阿方：これで解釈完了ってわけですね。けっこう強引だった気が・・・。

墓家：あまりうまくできてなかった、とは言いつこなしじゃ。

当たり外れはあるんじゃ、これがうまくないと思ったら君が新しい解釈を考えてくれたまえ。

阿方：また人任せにして。

墓家：解釈の方向性を決めて、そのあとにどうもおかしいなと思ったらそれはそれ。

別の解釈の可能性を考えなくてはならんぞよ。

阿方：うまくできてないと思ったらやり直せばいいのに。

墓家：まあ、いつなんどきでも頭の片隅にその歌をおいておくのがよいじゃろ。

気分転換に他のことをしてみたりしてる時に、ふと思ひ浮かんだりしてのう。

場合によっては、その歌だけにこだわらずに、次の歌をちょろっと見てみたりすると、ひょんなつながりが発見できたりして、

悩んでいた歌の解釈の糸口が見えたりもするかもしれんのう。

阿方：6・7番歌がつながって、ミレちゃん物語的なやつができてるっていう的なね。

墓家：なんか説明しすぎてて嫌じゃのう。

阿方：あんたのために補足してやってるのに・・・。

【旧説】

わが庵は都の辰巳しかぞ住む

世をうち山と人はいふなり

喜撰法師

私の庵は都の南東にあり、そこでただ静かに暮らしています。

しかし世間の人には世を憂えて

宇治山に引きこもっているのだと噂しているようです。